活力ある秋田 Vol.131

AKITA Way

［秋田市観光クチコミ大使］
東日本旅客鉄道株式会社
常務執行役員 東京支社長
白石敏男（しらいし としお）氏

東京支社に着任して1年。人口減少で鉄道利用の先細りが予測されるなか、経営ビジョンで「変革に挑戦」と謳っても、危機感を実感しにくいのが東京の弱点と感じていた。そこへコロナ禍である。ガラガラの電車を目の当たりにして、さすがに誰もが「これはまずい」と危機感を募らせている。今、秋田を思い出しながら「ピンチはチャンス。危機感をバネに変革だ」と社員を鼓舞する毎日である。

2014年に秋田支社長として赴任した私の重要な任務は「地方創生」だった。東日本大震災を経験したJR東日本は、2013年に発表した経営ビジョンで「地域に生きる」を掲げていた。観光による交流人口拡大、地方中核都市の駅を中心としたまちづくり等、「地方創生」は支社の重要な経営課題と位置づけられていた。

その大きな柱が、秋田駅周辺開発である。着任3か月後に支社ビル建替えが本社で意思決定されて本格的に始動したのだが、当初は手探りだった。「秋田に投資して大丈夫か」という社内の声、理解し難い「できない理由」等々。しかし、行政や商工会議所等の皆さんと方向性を議論し、2015年9月、秋田県・秋田市と「地方創生に向けたコンパクトなまちづくりに関する連携協定」の締結にこぎつけた。それを後押ししたのは「秋田を何とかしなくては」という地域の皆さんの危機感だった。その思いが秋田駅前地価の反転上昇につながったのだと思う。

協定締結を受けて、初めて開催した「あきた光のファンタジー」点灯式（同年11月）。旧支社ビルから打ち上げた花火を一目見ようと秋田駅西口駅前広場を埋めた3千人の人波に、来賓の方々が涙ぐまれていた光景は今でも瞼に焼きついている。

リゾートしらかみ新型「橅」編成導入に奔走したことも思い出される。1980年代、廃線の危機に瀕した五能線を「地域の足」から「乗ってみたいローカル線ナンバーワン」に変身させた原動力も、沿線の皆さんや鉄道の諸先輩の危機感だった。最初は「こんな辺鄙なところに観光客が来るはずがない」という声も多かったと聞く。しかし、地域が一体となって観光資源を発掘して磨き上げ、前例のない変革（絶景ポイントでの徐行運転、五所川原立佞武多復活、車内でのなまはげや津軽三味線の実演など、数えればきりがない…）を積み重ね、年間12万人以上の「観光」という新たな需要を生み出した。

今やリゾートしらかみは全国の観光列車のパイオニアと言われている。「知恵と工夫」で小さな「変革」を30年以上コツコツと積み重ねてきた結果である。

モノやカネが十分とは言えない秋田支社は「人で勝負する」――社員一人ひとりの「知恵と工夫」で道を切り拓いてきた。人口減少に真っ先に直面する秋田は、日本のトップランナーでもある。秋田で成功すれば、他に広がる。秋田駅周辺開発や五能線活性化は、社内で「AKITA Way」と呼ばれている。

秋田の強みは、厳しい環境と危機感だろう。危機感をバネに、地域が一丸となって「知恵と工夫」で「変革」に挑戦する。そのことで多くの「AKITA Way」が発信され、秋田がポストコロナ・人口減少時代の日本をリードする存在になることを期待している。

■略歴
1961年　東京都生まれ
1985年　日本国有鉄道　入社
1987年　東日本旅客鉄道株式会社　入社
2004年　同社　秋田支社総務部長（～2006年）
2014年　同社　執行役員 秋田支社長
2016年　同社　執行役員 総務部長
2019年　現職

秋田市観光クチコミ大使 … 秋田市に縁のある経済人や転勤等で過去に秋田市に在住経験のある方々に、身近な人々へのクチコミやインターネットでの情報発信を通じて、秋田市の観光PRにご協力いただくため委嘱している。